

審判の夢 —G. G. バイロン

楠 本 哲 夫

バイロン卿には 手を出すなよ
あとの崇りが 恐いぞよ

バイロンの身辺でたえず囁かれた言葉である。

時の桂冠詩人 Robert Southey (1774-1843) は変節詩人、追従詩人としてバイロンから完膚なきまでにたたきつけられた。ジョージ三世他界のとき、サウジーみずからが設定した天国への門前の＜審判の広場＞に、生きながらにして担ぎ上げられひき据えられ、無鉄砲な聖者ペテロによって、フェイトン⁽¹⁾のように まっさかさまに 湖の中につき落される。喧嘩名人バイロンの演じた見事な至芸、離れ技である。

註(1) 1812年、R. サウジーは ≪A Vision of Judgment≫ (ある審判の夢) を公にして、余計なへらず口をバイロンに向けた故に、バイロンの ≪The Vision of Judgment≫ (1822.10.25 審判の夢) によって報復を受け 徹底的にうちのめされた。このバイロン作≪審判の夢≫は 106連よりなるもので、フリーアを通じてイギリスに輸入された八行連を バイロンが＜脱線、ユーモア・諷刺詩型 abababcc 押韻＞として現地イタリアで 更に≪ベッポー≫へと工夫、開発した、その詩型による諷刺詩としてかかれている。

この作品は、バイロンの傑作であり、この詩型の特徴である脱線は極力押さえられ、すべてのスタンザが主題を展界し明らかにするのに役立っている。構造は緊密で無駄なく、コミックでシリアスな詩として、芸術的に完璧、知的

に首尾一貫、倫理的に深遠な最高の諷刺詩、珠玉的一篇として讃えられている。
85連～106連（終連）迄サウジーを登場させる。

LXXXV.

At length with jostling, elbowing, and the aid
Of Cherubim appointed to that post,
The devil Asmodeus to the circle made
His way, and looked as if his journey cost
Some trouble. When his burden down he laid,
“What’s this?” cried Michael; “why, ’tis not a ghost?”
“I know it,” quoth the Incubus; “but he
Shall be one, if you leave the affair to me.

やっとの思いで 悪魔アスモディアスが
押しわけかきわけ重荷を下ろす
この部署に任命された 智天使の助けを借りて
かなり苦勞して 仲間の処へたどりつく
「これは何じゃ？ 亡霊じゃないではないか」
ミカエルが叫ぶとアスモディアスが応える
「わかっています。私に一任下されば
こ奴をこれから 亡霊にしてやりますが

LXXXVI.

“Confound the renegado! I have sprained
My left wing, he’s so heavy; one would think
Some of his works about his neck were chained.
But to the point; while hovering o’er the brink
Of Skiddaw (where as usual it still rained),

I saw a taper, far below me, wink,
And stooping, caught this fellow at a libel —
No less on History — than the Holy Bible.

「畜^{ちきしょう}生！ 変節者め、あんまり重いので
左の翼^{はね}を痛めたわ。 奴^{やつ}が作品をわんさと
首の回りに 鎖^{つな}で撃^ういでいるのかも。
要点を申上げると、 スキドウ山⁽¹⁾の崖^{がけ}縁^{ふち}上空を
旋回中（いつものよう 雨が降っていた）
遙か眼下に 蠟燭^{ろうそく}の火が瞬くのが見えたので
襲いかかってゆき、 奴^{やつ}が聖書だけでなく
歴史も中傷している現場を ひっ捕^{つか}まえたのです

註(1) サウジーの住んでいた湖水地方のケジックにある山。

85連から106（最終）連まで 徹底的に サウジーをたたきつける。

先づ バイロンは 悪魔アスモディアスに サウジーを担^{かつ}がせ スキドウ山一帯ケジックから <審判の場> へと引きずり出す。そこは 亡者達のみが集り 神神の裁きを受け 霊界での落着き場所を宣告される場である。サウジーのみは 生^なきながらにして この亡者達の間にひきずり出され うち据えられる。 バイロンの パラディの手練、妙技である。

バイロンは 桂冠詩人を最も嫌った——詩人として最も卑しむべきものとして。特にサウジーに対しては、彼を唾棄すべき卑劣漢として蔑視した。（その数多の理由は 後述するとして）、<弱きを助け 強^{したた}かものをはじき出す> バイロンの仁俠道は サウジーに対して、猛然と火を吹いた。だが バイロンは、 サウジー如きは 自分の攻撃の相手にも 値^{ちんぴら}しない小物ぐらいにし

か考えず パロディ化して 揶揄し 諷刺し 愚弄する。

悪霊アスモゥディアスが やつとの思いで、羽を痛めてまで 智天使の助けを借り サウジーを、(彼の中傷の証據の数数の、ガラクタ作品の重荷と共に) 天使長 ミカエルの前に連れてくる。ミカエルは さすがに、サウジーが 亡霊ではないことに 驚く。アスモゥディアスは 平然として、生きながらに サウジーを 奈落の淵へたたき落すべき決意を述べ サウジーへの処置の一任方をミカエルに裁可を仰ぐ。

「わかっています。 私に一任下されば
こいつを これから 亡霊にします。」

バイロンは サウジーを血祭りにあげようとする。変節、追従、曲学阿世をバイロンは断じて許さぬ。

「ちきしょう！ 変節者め。 あんまり重いので
左の翼^{はね}を痛めたわ。 やつ 奴が作品をわんさと
首の回りに 鎖^{つな}で撃いでいるのかも」

アスモゥディアスの吐き出すような叫びは、バイロンが変節者サウジーの無節操な詩をかきなぐることへの怒りであり 愚弄である。

若き日バイロンは ≪イングランドの詩人たちとスコットランドの批評家たち≫の中でサウジーの多作を搶玉にあげて

見よ バラッド売りのサウジーが
驚の翼もて翔け 舞い上ると
毎年彼の歌は 夥しい軍隊さながら

カモインス、ミルトン、タッソーを打負かす

と揶揄し 多作、駄作を愚弄した。

サウジーの無節操、貌変ぶりは バイロンにとって不快極まるもので その多作、駄作も＜詩の売人＞と 決めつけ 愚弄したくなるのは もっともであろう。

「襲いかかって ^{やつ} 奴が聖書だけでなく
歴史も中傷している 現場をひっ^{つか}捕まえた」

サウジーは若い頃 ジャコバン思想を信奉し フランス革命を賛美した。

1794年、S. T. Coleridge と共に同志を集め アメリカ、Pennsylvania 州 Susquehanna 川の流域に ^{パンティソクラシー} Pantisocracy ＜一切平等団＞—— 共産主義を理想とするユートピア的理想郷。——を建設しようと熱心に計画する程の急進的思想を奉じたが、この計画も彼の変心により流産となった。

この《ある審判の夢》をサウジーが書く頃には 次第に自己の政治的態度を変えてゆきジョージ三世治下の保守政治を強力に支持する有力な文人となっていた。つまり頑固なトーリー党員の立場で、サウジーはこの詩を書いた。この作品において 天国の門前で審判により ジョージ三世を糾弾する者たちはサタンとともに地獄へ落とされ ジョージ三世は過去の偉大な人物たちに迎えられ 天国に入ってゆくのである。

この作品に見られるサウジーのジョージ三世に対する追従と歴史の歪曲を＜自由を愛する＞バイロンが＜^{とが}小賢しき変節者＞として糾弾し 血祭りにあげたのは もっともである。バイロンが 徹底的にサウジーを嫌ったのは むしろ 生理的に近いものがあった。＜俎上の鯉＞として 徹底的に揶揄し 罵り 弄ぶ。斯くして バイロンの 報復した 《審判の夢》は 最終連の終結迄 延々と続く。バイロンは サウジーからの 私的攻撃に対して（心中）烈火の如く怒って 友人キネヤードを通じて 決闘状を送り 決闘の場として

フランス海岸をあげている。

幸い、キネヤードはこれをサウジーに送らず事なきを得たが、このとき既に書き終えていた《審判の夢》を出版する決意を固め 1821. 10. 25 出版の運びとなった紆余曲折および決定的要因については後述するとして 戻も角、サウジーの《ある審判の夢》はバイロンの《審判の夢》によって消されてしまい

英文学史上の汚点としての悪名を残し バイロンの《審判の夢》が 光り輝く諷刺詩としての名声を高くし不滅の傑作として残ることとなった。

LXXXVII.

“The former is the Devil’s scripture, and

The latter yours, good Michael: so the affair
Belongs to all of us, you understand.

I snatched him up just as you see him there,
And brought him off for sentence out of hand:

I’ve scarcely been ten minutes in the air —
At least a quarter it can hardly be:
I dare say that his wife is still at tea.”

ミカエル様	前者はあなたの聖典で
後者はサタンの聖典です。だからお解りのように	
この事件は我我皆に	かかわることです。
御覧の通りの恰好の奴をほら、そこに捕えてきたのは	
即座に審判を	宣 ^{くだ} して貰いたい為です。
ものの十分間も	空を飛んだでしょうか
せいぜい まあ	十五分くらいかも
奴 ^{やつ} の女房は多分まだ	茶を啜っているでしょう

LXXXVIII.

Here Satan said, "I know this man of old,
 And have expected him for some time here;
 A sillier fellow you will scarce behold,
 Or more conceited in his petty sphere:
 But surely it was not worth while to fold
 Such trash below your wing, Asmodeus dear:
 We had the poor wretch safe (without being bored
 With carriage) coming of his own accord.

ここでサタンは云う 「儂はこの男を知っとる、昔から。
 そのうち此處へ来ると予期していた。
 奴ほど愚か者 また 自惚の強い奴は
 まずいないじゃろう あの地球には。
 アスモディアスよ こんな半端者も翼にくるんで
 運んでやることなんか、なかったんじゃ
 この哀れな奴はくうんざりして運び上げて
 やらずとも＞自ら進んで無事此處へ来たのに

「最も愚かな、自惚の強い、哀れな奴、半端者！」 とバイロンは、たたきつける。 バイロンにとって サウジーの存在は 全く眼中にない、詩人の風上にもおけない三級品にも不拘、桂冠詩人として 権威に追従することがうとましく思へ 唾棄すべき嫌悪感をいだかせたのである。

LXXXIX.

"But since he's here, let's see what he has done."
 "Done!" cried Asmodeus, "he anticipates
 The very business you are now upon,

And scribbles as if head clerk to the Fates.
Who knows to what his ribaldry may run,
When such an ass as this, like Balaam's, prates?"
"Let's hear," quoth Michael, "what he has to say:
You know we're bound to that in every way."

「まあ、ここに来たからにゃ、奴のした事を聞いてやれ」
「奴のしたこと！」 アスモディマスは叫んだ
「奴は貴方の手がけておられる仕事を予測して
書きなぐっておるだけです、運命の神の第一書記のように。
わかりやしませんよ、この頓馬奴がほざくと、どんな
下品なことを言いたてるか。バラムの驢馬⁽¹⁾の如^い」
「まあ、聞いてやれ、何と言うか」 ミカエルは宣う。
「聞いてやるのが我らの義務^{つとめ}だからな、兎に角」

註(1) 話す力を与えられた驢馬《民数記》

XC.

Now the Bard, glad to get an audience, which
By no means often was his case below,
Began to cough, and hawk, and hem, and pitch
His voice into that awful uote of woe
To all unhappy hearers within reach
Of poets when the tide of rhyme's in flow;
But stuck fast with his first hexameter,
Not one of all whose gouty feet would stir.

さてサウジーは 地上ではなかった事だが

聴衆を得たことを喜び せき拂いして
 老人よろしく、えへん！ と言い、声の調子を^{ととの}整え
 恐ろしく哀しい^{ひびき}音調を 聞かせ始めた
 詩人の声の聞える範囲内にいる不幸な^{ききて}聴衆に向って。
 かくて そのリズムは流れ出すが
 最初の六詩脚で 完全につかえて
 痛風の脚⁽¹⁾はどれも 動こうとしなかった。

註(1) サウジーの詩の流れの悪い様が 痛風にかかった脚^{あし}にたとえられる。

サウジーの《ある審判の夢》は、あまり成功の例を見ない無韻詩でかかれて
 いる。つまり最初の六詩脚でつまずき うまく^{詩脚押韻}ライムできないのをバイロン
 は 茶化し揶揄し愚弄する。サウジーのこの詩は全くひどいものだ とバイロ
 ンはさりげなく酷評しているが、事実 政治的立場からも その追従的姿勢に
 おいても救い難い ひどいものである。

この詩を攻撃したバイロン詩の《審判の夢》の随時随所に見せたバイロンの
 押韻の妙技、は格別にすばらしく正に神技であることを思うとき ^{どおろく}濁酒と 銘酒
 とそこに雲泥の実力の差をまざまざと見せつけられる。

この同じ題名の詩によって 桂冠詩人サウジーの名声は遂に失墜してしまっ
 た。

XCI.

But ere the spavined dactyls could be spurred
 Into recitative, in great dismay
 Both Cherubim and Seraphim were heard
 To murmur loudly through their long array;
 And Michael rose ere he could get a word
 Of all his foundered verses under way,
 And cried, "For God's sake stop, my friend! 'twere best —

'Non Di, non homines' — you know the rest."

だが飛節内腫に羅った ^{ダクティル}強弱弱格に
 拍車をかけて ^{レンタティーボ}絃 唱 調にする前に
 長い列の智天使と織天使は 仰天して
 大声で不幸を洩らすのが、聞こえてきた
 ミカエル様は蹄葉炎^{かか}に羅った、朗読される詩が
 皆目わからぬまま 立ち上って叫んだ
 「君、御生だから止めてくれ。大事なことは——
 “神も人も許さぬ” ⁽¹⁾—— 続きは知ってるだろう」

註(1) ホラチウス《詩論》 “詩人の凡庸さは神も人も本屋も許しはしなかった”
 (11. 372-3)

XCII.

A general bustle spread throughout the throng,
 Which seemed to hold all verse in detestation;
 The Angels had of course enough of song
 When upon service; and the generation
 Of ghosts had heard too much in life, not long
 Before, to profit by a new occasion:
 The Monarch, mute till then, exclaimed, “What! wtat!
 Pye come again? No more — no more of that!”

ざわめきが起きた 一斉に群衆の間に
 皆が詩を 毛嫌いしてるようだ
 天使はむろん仕事上 ^{いや}嫌ほど歌い過ぎるし
 亡霊達は瞬^{しばら}く前の現世でも聞き飽きてたので
 新しい機会を得ても 三文の得も無いことだ。

するとその時 黙してた王が叫んだ
「何だ！ 何だ！ またパイ⁽¹⁾が来たのか！
もう沢山だ, 聞きたくもないぞ！」

註(1) ヘンリー・ジェームス・パイ (1745-1813) 1790桂冠詩人となった。

サウジーが 自作の詩を得意然と朗読し始めると サウジー以前の、笑い者となった桂冠詩人のパイがまたやって来たと思ったジェームス三世の霊は にがにがしく 吐き出すように <もう聞きたくない、沢山だ>と叫ぶ。

桂冠詩人への揶揄、諷刺はここでも繰返えされる。しかもバイロンは任命権者ジェームス三世みずからの口から苦苦しく吐き出させている。

XCIII.

The tumult grew; an universal cough
Convulsed the skies, as during a debate,
When Castlereagh has been up long enough
(Before he was first minister of state,
I mean — the *slaves hear now*); some cried “Off, off!”
As at a farce; till, grown quite desperate,
The Bard Saint Peter prayed to interpose
(Himself an author) only for his prose.

ざわめきは募りゆき 空咳がなべて
空を歪にし カースルレイ⁽¹⁾の
長広舌のようだった (つまり宰相就任前の
“奴隷達よ 黙って僕の云うことを聴け！” と)
茶番劇を観るよう だれかが叫んだ
「下^さがれ！ 下^さがれ！」と。 遂に詩人は必死の思いで

詩をかくペテロ⁽²⁾に 仲介をたのんだ
 散文だけでも 朗読^{よま}してくれと。

註(1) ロバート・スチュワート・カースルレイ (1769-1822) が総理大臣になる
 と、下院議員たちが卑屈な態度で彼の演説をきいたことを指す。

(2) ペテロが《第一の手紙》と《第二の手紙》を書いたことを指す。

XCIV.

The varlet was not an ill—favoured knave;
 A good deal like a vulture in the face,
 With a hook nose and a hawk's eye, which gave
 A smart and sharper-looking sort of grace
 To his whole aspect, which, though rather grave,
 Was by no means so ugly as his case;
 But that, indeed, was hopeless as can be,
 Quite a poetic felony “*de se.*”

この下劣野郎は 醜い奴ではなかった
 顔は秃鷹に似て 鼻は鷲の嘴のようで
 目は鷹のよう鋭く その為 スマートで
 鋭敏で いかにも 優雅な容貌で
 多少生面目^{きまじめ}だが 今の立場程醜くはなかった。
 それにしても この不様^{おさま}は
 どうしようもなく 救い難いもので
 詩人としては 自殺行為だ まったく

1813年9月26日 バイロンは ホランド卿の館で初めて サウジーに会った。
 その時、好印象をうけて トマス・ムア宛に1813年9月27日付で、「昨今、こ
 れほど顔立ちのよい詩人は見たことがない。……」と書いている。

この連の中でさえも「この下劣野郎は醜い奴ではなかった」と詩っている。

XCV.

Then Michael blew his trump, and stilled the noise

With one still greater, as is yet the mode

On earth besides; except some grumbling voice,

Which now and then will make a slight inroad

Upon decorous silence, few will twice

Lift up their lungs when fairly overcrowded;

And now the Bard could plead his own bad cause,

With all the attitudes of self-applause.

更に高く喇叭を吹き 騒ぎを鎮めたミカエルは。

地上、天界 いづれでも 用いられる様式だが

そうすれば 再び声を張り上げるものはない

＜礼儀正しい静寂を時折破る＞ゆえの不満声の他は。

かなり人が溢れていても 利き目ある様式で

今や詩人は 自分の不利な立場を

まさざまに 自讃しつつ 言い繕^{つく}ろい

述べたてることができた 救いの喇叭で

サウジーの政治的立場、見解を述べる、その詩の醜悪さ、ひどいものであるのを 黙らせようとする群衆の騒ぎを やっとミカエルに 制してもらい サウジーは さらに、くどくどと自分の立場を弁護し くだらぬことを述べたてる、そして醜態をいつまでも 演ずる。バイロンの怒りも、みずから、むしろサウジーの醜態にあきれはてて、＜嗤^{わら}え、嗤え＞と 黙した群衆と一緒にあって心中 野次り続ける。

XCVI.

He said — (I only give the heads) — he said,
 He meant no harm in scribbling; 'twas his way
 Upon all topics; 'twas, besides, his bread,
 Of which he buttered both sides; 'twould delay
 Too long the assembly (he was pleased to dread),
 And take up rather more time than a day,
 To name his works — he would but cite a few —
 “Wat Tyler” — “Rhymes on Blenheim” — “Waterloo.” ⁽¹⁾

彼は喋った——要点だけでいうと——述べたてた
 「私は悪意なく書きなぐる どんな事でも
 書くのが私の流儀。一挙兩得 パンの為にも
 しかも 両面バタつきの 頗る美味の。
 私の作品を枚^あ挙ると 集会は長引き
 一日ではすまなくなるから（それを氣遣い）
 二三だけしか挙げられぬが——《ワット・タイラー》⁽¹⁾
 《ブレーナムの歌》と《ワートルロー》 です」

註(1) 《ワット・タイラー》(1794) と 《ブレーナムの戦い》(1798) では
 急進的な共和主義者の立場をとり 《ワートルローへの詩人の巡礼》(1810)
 では 共和主義の敗北を歌った。

猫の目の如く変るサウジーの節操なき詩はバイロンにとって＜詩の売人＞
 として＜どんな事でも書くのが私の流儀、一挙兩得パンの為にも……＞ と
 映し、バイロン自身の＜力＞と＜熱氣＞と＜誠実＞に溢れる詩とは、およそ
 かけ離れたものでしかなかった。

XCVII.

He had written praises of a Regicide;
 He had written praises of all kings whatever;

He had written for republics far and wide,
 And then against them bitterer than ever;
 For pantisocracy he once had cried
 Aloud, a scheme less moral than 'twas clever;
 Then grew a hearty anti-jacobin —
 Had turned his coat — and would have turned his skin.

「私は 王殺害を 讃えて詩った
 王は すべて 讃えて詩った
 広く遠く共和国を 支持して詩った
 そして 共和国を 激しく糾弾して詩った
 パンティソグラシー⁽¹⁾を 高らかに唱えた
 それは道徳的というよりも 小利口な計画
 それから 心底から 反ジャコビン主義に転身
 上衣も裏返し 皮膚まで裏返したかも

註(1) 前述のこの云葉は<一切平等団>の意。'pant' (all) + 'isocrcy' (equality of power) の意味で、コウルリッジまたはサウジーの造語とされている。

XCVIII.

He had sung against all battles, and again
 In their high praise and glory; he had called
 Reviewing "the ungentle craft," and then
 Became as base a critic as e'er crawled —
 Fed, paid, and pampered by the very men
 By whom his muse and morals had been mauled:
 He had written much blank verse, and blanker prose,
 And more of both than any body knows.

「あらゆる戦争に 反対の詩を書いた
 あらゆる戦争の 栄光を讃う詩もかいた
 評論家を＜最も紳士からぬ職業＞と呼びながら
 私が最も卑劣な その批評家となった
 私の詩を道徳性を 酷評した輩^{やから}から
 奢ってもらい金をもらい ちやほやされた
 多くの無韻詩を書いた もっと無意味な散文も
 そして量り知れぬほど 積もりに積もった

XCIX.

He had written Wesley's life: — here turning round

To Satan, "Sir, I'm ready to write yours,

In two octavo volumes, nicely bound,

With notes and preface, all that most allures

The pious purchaser; and there's no ground

For fear, for I can choose my own reviewers:

So let me have the proper documents,

That I may add you to my other saints."

「ウェスリーの伝記も書きました」そして振向き云った

「サタン殿、貴方の伝記の準備もできました

八っ折、二巻の 豪華本で

序文もつけ註もつけ 頗る魅力的だから

敬虔な読者も惹きつけます。御心配は不要

私には自身の評論家も選べますから

だから 必要書類を お渡し下さい

貴方を聖者の仲間に加え得ますように」

C.

Satan bowed, and was silent. “Well, if you,
 With amiable modesty, decline
 My offer, what says Michael? There are few
 Whose memoirs could be rendered more divine.
 Mine is a pen of all work; not so new
 As it was once, but I would make you shine
 Like your own trumpet. By the way, my own
 Has more of brass in it, and is as well blown.

サタンは会釈するも 無言だった
 「わかりました。 優しく謙虚な貴方が辞退なさるなら
 ミカエル様は如何でしょう 私の申出は？
 回想録を仕上げるのに貴方が最も神聖です
 私のペンは万能です。昔ほど今は新鮮ではないが
 私は貴方を輝かせてみせます。 貴方の喇叭のように。
 ところで私の喇叭は いかにも
 真鍮の混ざり具合が 多いようだが
 音色は どれにも 引けをとりません

サウジーは サタンから断わられる。更に機を失せず ミカエルの伝記を書くことを申し出る。＜私のペンは万能です＞ という。

CI.

“But talking about trumpets, here’s my ‘Vision’!
 Now you shall judge, all people — yes — you shall
 Judge with my judgment! and by my decision
 Be guided who shall enter heaven or fall.

I settle all these things by intuition,
 Times present, past, to come—Heaven — Hell — and all,
 Like King Alfonso. When I thus see double,
 I save the Deity some worlds of trouble.”

「ところで＜喇叭＞と云へば これが私の＜構^{ヴィジョン}想＞です
 さあ皆様、裁いて下さい そうです、私の考に従って
 裁いてください 誰が天国に行くか
 誰が地獄に落ちるかを。私の構想によれば
 現在 過去 未来—天国、地獄—そして全てを
 直観で処理します。アルフォンソ王⁽¹⁾のように。
 私にはこのように 誰よりも二倍も観じ得るので
 神の地上への裁きの手間も省いてさしあげましょ

註(1) アルフォンソ王 (1221-84) はカスティリアの王。天文学に造詣深く、プレトミーの体系について“世界の創造時に相談を受けていたら 神が愚かなことをしないでいようにしただろうに”と言った＜バイロン原註＞

CII.

He ceased, and drew forth an MS.; and no
 Persuasion on the part of Devils, Saints,
 Or Angels, now could stop the torrent; so
 He read the first three lines of the contents;
 But at the fourth, the whole spiritual show
 Had vanished, with variety of scents,
 Ambrosial and sulphureous, as they sprang,
 Like lightning, off from his “melodious twang.” ⁽¹⁾

ここで 喋べるを止め 原稿を取出す

ベラベラとそれを 彼が読み上げるのを
 悪魔 聖者、天使群が 制止するも きかず
 最初の三行を 彼は読んだ だが
 四行目の箇所では 聖霊は皆 消えた
 甘露 硫黄⁽¹⁾の香りを ふりまきながら
 彼の“妙な鼻ごえ”から 逃げ出してゆき
 稲妻のごとく かき消えた

註(1) 甘露は 神々の食物。
 硫黄は 地獄の火の構成要素

CIII.

Those grand heroics acted as a spell;
 The Angels stopped their ears and plied their pinions;
 The Devils ran howling, deafened, down to Hell;
 The ghosts fled, gibbering, for their own dominions —
 (For 'tis not yet decided where they dwell,
 And I leave every man to his opinions);
 Michael took refuge in his trump — but, lo!
 His teeth were set on edge, he could not blow!

この大言壮語は 呪文として働いた
 天使らは耳を塞ぎ 風切羽をばたつかせた
 悪魔らは耳を襲する音に、咆哮し地獄へ落ちた
 亡霊どもは歯を鳴らし、各、落着き場所へ逃げる
 (だが何処へ定住するかは 未定なので
 その行先は まあ 彼に一任しよう が)。
 ミカエルは喇叭に 救いを求める—だが見よ！
 彼の歯が浮き 喇叭が吹けぬ！

CIV.

Saint Peter, who has hitherto been known
 For an impetuous saint, upraised his keys,
 And at the fifth line knocked the poet down;
 Who fell like Phaeton, but more at ease,
 Into his lake, for there he did not drown;
 A different web being by the Destinies
 Woven for the Laureate's final wreath, whene'er
 Reform shall happen either here or there.

聖ペテロは無鉄砲故に 評判だが
 鍵をふりあげ 五行目のくだりで
 詩人をうちのめした。 彼はフェイトン⁽¹⁾よろしく
 みずからの湖へと 落ちてゆく
 だがより気楽に 其処で彼は溺れぬ故。
 別の織物を 女神達が織っていた
 この桂冠詩人を 最後の花冠で飾る為
 地上、天上の常として 改革ある時はそうだ

註(1) アポロの息子。父の戦車である太陽を御しきれずゼウスの雷にうたれ 海中に落ちた。 アポロは詩神でもある。

CV.

He first sank to the bottom — like his works,
 But soon rose to the surface — like himself;
 For all corrupted things are buoyed like corks,
 By their own rottenness, light as an elf,
 Or wisp that flits o'er a morass: he lurks,
 It may be, still, like dull books on a shelf,

In his own den, to scrawl some "Life" or "Vision,"
As Welborn says — "the Devil turned precisian."

サウジーは先づ湖底に沈む一彼の作品のように
だが湖面に浮上する—— 彼自らのように
何故なら、あらゆる腐蝕物は コルク⁽¹⁾の如、浮上する
その腐蝕性ゆえ 軽やかに妖精のごとく
沼地の上を舞う鬼火のように 浮上するもの
サウジーは潜んでいるかも、書棚の退屈本の如く。
彼の隠れ家で<伝記>や<夢>を 書きなぐっているかも。
ウェルボーン⁽²⁾の云った、"清教徒となった悪魔" よろしく

註(1) 溺死体は腐るまで底にあって それから浮上するのは 周知のこと。

(2) フィリップ・マッシンジャー (1583-1640) <昔の借金を拂う新しい方法>
(1628) に登場する人物。

CVI.

As for the rest, to come to the conclusion

Of this true dream, the telescope is gone
Which kept my optics free from all delusion,
And showed me what I in my turn have shown;
All I saw farther, in the last confusion,
Was, that King George slipped into Heaven for one;
And when the tumult dwindled to a calm,
I left him practising the hundredth psalm.

R^a Oct. 4, 1821.

結論を云うと	この ^{まさゆめ} 真夢の 結末は
私の目には	事実だけを 見せ

私が代ってあなた方の為に 喋ってあげた
 その望遠鏡が もう失くなってしまった
 その最後の混乱の中で 更に私が見たものは
 ジョージ三世は うまく天国に滑りこんだ
 その騒ぎがおさまり鎮かになったとき
 私は王が讃美歌百番を 弾いているのを後にした

ジョージ三世の審判は サウジの騒ぎで中断されたが バイロンは、結局
 ジョージ三世を地獄へ落さず、王は^{みずか}自らの力で うまく天国へと入ってゆく。
 積極的に送りこんだのではなく サウジの犯した神への冒瀆的態度を快しと
 せず、はねつけた。まことに 豊かな、寛大な心の持主であるバイロンの、政
 治的に、宗教的に、文学的に、その識見の卓越せるを刻明に浮きぼりにして見
 せた諷刺、皮肉、ユーモアとシリアス、ウィットに富む絶妙な結末である。

《審判の夢》でバイロンが諷刺の対象としたものは、重大にして 深刻な問題
 であった。

なぜなら、サウジが 《ある審判の夢》で象徴した《十九世紀初頭のイギ
 リスの政治的、宗教的、道德的そして文学的状況》を、バイロンは取上げて
 サウジの立場と自分の立場との差異を鮮明に浮彫にしてみせた。

政治的には バイロンはリベラルなウィッグ、サウジはトーリー 宗教的
 にはバイロンは 寛容、サウジは不寛容の立場をとっている。

サウジの《ある審判の夢》を略述すると12の短い部分から成り 全体で約
 640行の長さである。詩形は無韻詩 6 詩脚である。

12の部分は〈夢〉〈墓所〉〈目覚め〉〈天国の門〉〈糾弾者〉〈赦面者〉
 〈烈福〉〈国王〉〈昔日の偉人〉〈ジョージ王朝の偉人〉〈若い亡霊〉〈再

会>からなっている。

プロットは次の通りである。

ジョージ三世の弔いの鐘を聞きながらサウジーは夢の世界に入る。そこで目覚めたところは墓所で ジョージ三世が審判を受けるべく天国の門へと上って行くのを見る。

ウィルキーズやジュニアスは王を糾弾するが結局サタンと共に地獄へ落ちて行く。

そしてジョージ三世は かつては彼に敵対したが今は天国にいる者から許されて あらゆる時代の国王や偉人たちに迎えられて天国に入ってゆく。

かくて夢から覚めたサウジーは なお、ダーウェント湖のほとりにいて 現実通りに弔いの鐘を聞いている。そこで結末となっている。

バイロンの《審判の夢》は このサウジーの《ある審判の夢》の12の部分の中の、特に<天国の門>と<糾弾者>の部分のプロットとして借用している。そしてバイロン自らの全く異った対立した視点から<審判の場面>を描いている。詩型は(前述)《ベッポー》《ドン・ジュアン》で用いた、あの創意工夫され、イタリアではじめて開拓した詩型 八行連、を用いている。106連から成り立っている。

構造的には<導入部>(1~15連)、<サタンの糾弾>(16~65連)、<ウィルキーズとジュニアスの証言>(66~84連)、<サウジーの登場>(85~106連)の四つの部分から成り立っている。

導入部では 天国の門のそばで うとうととする聖ペテロを先ず描く。ペテロのもつ鍵が錆びついているのは、フランス革命以来の、新しい時代への転換期に当って権力闘争の故にいづこも血の粛清による、殺し合いの続いたために天国に入門許可を申し渡されるものが絶えていたことを物語っている。

ジョージ三世は＜専制者ではなかったが／専制者を保護し＞ ＜彼ほど国土を荒廃させた王もいなかった＞（8）と詩っている。ジョージ三世の豪華な葬儀に涙を流す者は、悲しむ者はいなかったが、問題になるのは＜王の魂の行方＞である。

この点について バイロンは自分の見解を立場を明にしている。

「神よ、王を救い給え！」 こんな王を救うのは
神の寛大な配剤だ。 神が救済するのなら
結構なことだ。 というのは 僕は
地獄行きを良しとは 考えぬから 」（13）
と、寛大な雅量を示している。

これに対し サウジーの《ある審判の夢》は ジョージ三世の魂は勿論 救済に値すると考えるが、他の諸々の魂は容赦なく地獄に落とす、その決定権をみずからもつが如く述べたてる。

＜誰が救われ 誰が地獄落ちになるか
わたしの決定に 従って下さい＞（101）

とは実はサウジーの言葉であり、みずからが＜神の立場＞に立って人の魂の行方を裁こうとする。自分の政敵を、自分の気に入らぬ者はすべて地獄に落とそうとする。正に神への冒瀆的所業である。

これに対し バイロンは 地獄に落とされて当然である自由の敵、ジョージ三世でも、神が救うのなら それでもよい と宗教的にもサウジーと対照的に度量の豊かさを示している。

バイロンのこの＜導入部＞に出てくるナレーターは 政治的にはジョージ三世の治世を糾弾するウィッグであり 宗教的には＜国王は道具である＞との雅量をも示す人物である。＜導入部＞で示すバイロンの政治的糾弾と 宗教的寛

容のポーズは シリアスな面として最も重要である。

第2部は＜サタンの糾弾＞（16～65連）で サタンが、ジョージ三世は＜永遠の責苦を免れ得ない＞ことを述べ立てる。即ち 彼の時代ほど流血を見た治世はなかったこと、旧世界は今なお、彼と彼の部下が用意したものの下で呻吟していること。カトリック教徒に同等の権利を与えることに反対したこと。つまり、政治的反動と宗教的不寛容をサタンは厳しく糾弾する。

サタンは厳しく、かくの如く糾弾したほどジョージ三世の治世はひどいものであり、王の地獄行きは避けられないものであった。

にも不拘、結局、サタンは 「ジョージ三世程地獄行にふさわしい人物はいないが＜地獄には多過ぎるくらいの王がいるから＞」 といってその、審判の決定を、積極の姿勢で一任する。この寛大さがバイロンのポーズで、＜気に入らぬ者はすべて地獄落ち。ジョージ国王はちがうが＞とするサウジー的ポーズと全く異っている。

第3部は＜ウィルキーズとジュニアスの証言＞（66～84連）の場面である。

ウィルキーズは王を中傷したため1764年、国外追放となる。生前はジョージ三世の政敵であったこの男も、今ではもう王を糾弾する気はなく＜わたしはもう許しています。そして天国に行けるように、王のため人身保護令を支持します。＞（84） とサタンと同じく寛容な態度を示すのが バイロンのポーズである。ジュニアスも 同様ジョージ三世を地獄に落とすことに興味を示さない。

かくしてジュニアスが消えたとき、アスモディアスを使ってバイロンはサウジーを＜審判の場＞へと引きずり出す。そして サウジー自身が審かれて行くのを 愚弄しつつ 笑いつつ、彼の《審判の夢》第4部＜サウジーの登場＞を終結へと導いてゆく。その妙技は見事であるがバイロンのねらいは

単なるサウジーへの報復という小事にこだわったのでは決してなかった。

たしかにサウジーが《ある審判の夢》に付した序文の中でバイロンに対する攻撃を公にしたことがバイロンを激怒させたことが、事の起りの真相ではある。

先ず サウジーは バイロンが道徳的に高き英文学の伝統に対し背德的詩をばらまいたことを嘆き、かくの如き作品を出版することは社会の安寧に対する最悪の罪として、名ざしこそしなかったが このような詩をかく詩人を悪魔派と呼んだ。 これら悪魔派の作品は人間社会の掟に反逆しキリスト教を憎む分子としてバイロン、シェリーを槍玉にあげたことは明白である。そして更に道徳の低下は国家の基盤を揺らがすものである故に注意するようにと時の政府勧告にまで及んだ。

1381年に農民一揆を起こしたワット タイラーを主人公とする急進的ジャコバン思想に心酔したサウジーの見事な変節ぶりである。

サウジーは＜自分だけしか愛し得ない＞人物であり バイロンのコスモポリタンとしての大器の前には 齒もたたない存在であったことは万人の認めるところであるが、あまっさへ、彼は 追放後のバイロンに関する次の如き噂を流布した（サウジー自身は、極力、その事実を否定したが）。

＜バイロンとシェリーが近親相姦の盟約を結んで実践した＞との噂をサウジーが流したことで、バイロンは1818年11月11日付の親友ホブハウス宛の手紙で「あいつは悪党で大嘘つき野郎だよ」と激怒のことばを書き送っている。

レディ・バイロンは望遠鏡で追放後のバイロンの乱行を監視し続け、それを刻明に丹念に、（生涯をみずから閉じる日迄）、書き続けることを生き甲斐としたと伝えられる。サウジーが、スイスでのバイロン、シェリー、メアリ、クレ

アとの仲睦まじい交友を視察しに出かけたことも、そして ろくでもない噂を流布したことは、しかし、充分に考えられることである。

バイロンは＜詩とは、人生批評，社会批評＞であると云い切る。政治を歪め、宗教を歪め、歴史を歪めた 変節漢サウジの《ある審判の夢》が 嘘、虚偽を最もきらい、敵なき如く自由奔放に 自らの心のそのままを吐露し真実のみを詩い続けたバイロンの《審判の夢》によって 詩人として再起できぬまでにたたきつけられて地に伏したのは もっともであり、しかも、バイロンは 実、サウジ如き雑魚は相手にしなくなかったのだが 売られたケンカだから仕方なかった というのが 真相である。

バイロンはこの詩を コミックに而もシリアスに描いているが、不滅の諷刺詩として完璧に詩い、政治を、宗教を、歴史を、真実を絶体にまげることは許されないことを強く訴えている。

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford, Byron: Hutchson.
- 2) Ernest Hartley Coleridge. The Poetical Works of Lord Byron: Lewis Prints.
- 3) Leslie A. MArchand, Byron's Poetry: John Murray.
- 4) Bernard Blackstone, Byron: Longman.
- 5) John D. Jump, Byron: Routledge & Kegan Paul.
- 6) Lafcadie Hearn, The English Romantic Poets: 北星堂。